

結縁の日めくり

その五

＊

五十四年 照第一天
打箇趺跳 触破大千
噫 渾身無覺 活陷黄泉

読み下し

五十四年 第一天を照らす
箇のぼつ跳を打して 大千を触破す
噫 渾身もとむるところなく
活きながら黄泉に陥つ

意訳

醒めつづけた 我が五十四年間の境涯は
幻覚の世界を無心に照らしてきた
天地の妖魔に与しやすい自我を打ち砕いて
虚構の条件づけをも手放すのだ
論理というやつは展翅板に並べた蝶だ
それは生と交わることはない
あの世に足を踏み入れて陥ちなければ
この世が生き活きと花開くことはない
ああ この身に何の野心があらう
竹の中のように空っぽでいることだ
一瞬一瞬 死と生のはざままで
だれにも奪えないこの実存を
言あげしないで生きてみないか
途方もなく ビューティフルに

道元の遺偈より

北越の山々を愛した道元は、入山後 10 年、54 歳で劈頭の偈を残して遷化しました。人生で屈託したら、私は時折、最も敬慕する人の一人である道元の遺偈や著書を味読することになっています。淫志（物事に惑溺している心情）を取り除いてくれること請け合いです。道

元の文体は、和文と漢籍との混淆体ですが、何度読んでも、透き通るような静謐さがありますので、ときに辛辣警拔な言葉に出会っても、不思議にこころ惹かれ、ある種の境地へと誘ってくれます。

天童山で師の如浄より嗣法を伝授された道元は、生涯無一物、後醍醐帝から恩賜の紫衣を贈られても一度も袖を通すことなく、無欲で名利に恬淡とし、峻厳なまでに「只管打座」（ただひたすら座禅に打ち込むこと）に明け暮れ、弟子たちを教導し続けました。

「……当寺始て首座を請じ、今日初て秉弘を行なはしむ。衆の少きを憂ふること莫れ。身の初心なるを顧みることなかれ。汾陽は僅に六七人、葉山は十衆に満たざるなり。然あれども皆仏祖の道を行じき。是を叢林のさかんなると云き。見ずや、竹の声に道を悟り、桃の花に心を明らむ。竹豈利鈍あり迷悟あらんや。花何ぞ浅深あり賢愚あらん。花は年年に開くれども人みな得悟するに非ず。竹は時時に響けども聞く者尽く証道するにあらず。ただ久参修持の功により、弃道勤勞の縁を得て、悟道明心するなり。是れ竹の声の独り利なるにあらず。亦花の色の殊に深きにあらず。竹の響き妙なりと云へども自ら鳴らず、瓦らの縁をまちて声を起こす。花の色ろ美なりと云へども独り開くるにあらず、春風を得て開るなり。学道の縁もまたかくの如し。此の道は人人具足なれども、道を得る事は衆縁による。人人利なれども、道を行ずることは衆力を以てす。ゆえに今ま心をひとつにし志をもっぱらにして、参究尋覓すべし。玉は琢磨によりて器となる。人は練磨によりて仁となる。いづれの玉か初より光りある。誰人か初心より利なる。必ずすべからくこれ琢磨し練磨すべし。自ら卑下して学道をゆるくすることなかれ。古人の云く、光陰空くわたることなかれと。……」[*2]

これは、弟子の懷奘が師の言葉を書き留めた記録『正法眼蔵随聞記』第四の五からの抜き書きです。中国の禅僧の香巖智閑（庭を掃いていたとき小石がポーンと撥ねて、竹に当たって豁然として大悟した）と靈雲志勤（春、桃の盛りの花を見て忽然として悟道した）の有名なエピソードを引き合いに出して、竹と桃の花は、石と春風の機縁があるからこそ悟りが開花することができることを示しています。ここには見るものと見られるものの分別はありません。一瞬の中に永遠が目覚めるのです。仏道を学ぶには、下根の者でも、清貧を友とし、参禅修業を懈怠することなく実践し、平々凡々として励むこと（仏祖の行履）によって途がひらける、と云っています。玉は鍛えられてこそ、初めて美しい玉となるのです。そうでないと何十生を生きようと、身心を放下し、了解（realize）することなどできないのです。生命をすら放擲できなくて何の修証[*3]か、と問われているようです。いたずらに、時を空しく過ごしがちな私たちには、この一文は耳が痛くなる部分でしょう。

次に、『正法眼蔵』の「現成公案」より私の好きな「身心脱落」の一節を採りあげます。

「仏道をならふといふは 自己をならふなり。自己をならふといふは 自己をわするなり。自己をわするるといふは 方法に証せらるるなり。方法に証せらるるといふは 自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。悟迹の休歇なるあり。休歇なる悟迹を長長出ならしむ……」

お分かりでしょうが、道元の論法は演繹的に話を進めていくのが特色です。この難解な章句は、西欧流の合目的的なアプローチでは、いくら強靱な顎があっても不得要領です。それは分析的論理の埒外にあるからです。‘TAO’や‘ZEN’を分かるためには、咀嚼や論証ではなく、直感的洞察が必要なのです。しかし、‘すべての時は同時に生じている’と云う最先端の物理学の考え方もありますので、いまや、その真髓に近づきつつあるようです。仏道をなろうというのは、悟るということです。自己を十分深く知り尽くして、明らかにしたということです。雛鳥が、飛ぶ親鳥に習うみたいにならうのです。やがて、小鳥は巢を棄て、飛翔を試みます。その刹那、自己意識を忘れ、兀然と空と一体になり、飛ぶことができるのです。生に執着する、思わせぶりの小我を棄てなければ、大我という万法大自然に生きることはできません。修証や生死を分けて考えてはいけないのです。世間的な財物や名声を求めると出世間的な宗教的悟りを求めることは、立場が違うように見えますがコインの裏と表で同じことなのです。永遠の至福をわがものにしたいという、対象化した自分の悟りや他人の悟りをも脱落して、透明にならなければ、一切が一如とはなりません。一瞬の閃きにも拘泥してはいけないのです。悟った迹をどう生きるかが問題となるでしょう。そこでは前後関係という意識を持つてはいけません。〈誰かである自分〉を捨て去り、あるがままの生を受容して、〈誰でもない自分〉の実体にとらわれなく生きることです。言い換えるなら、自らの悟りや救いに魅入ることなく、悟りの跡形も見せず、陋巷にいて、すべてを肯定しながら、肩ひじはらず、ゆったり暮らしていればいいのです。『臨濟録』にも、「……^{ただ}祇是平常。^{じやくえきつぼん}著衣喫飯、無事過時。……」[*4]ただ平生通りに、着物を着たり飯を食ったり、平穩無事に時を過ごす、とあります。来歴や是非に束縛されずに、淡々とのんびりして、無碍自在に生きたいものです。最後に、良寛も思慕してやまなかった道元の和歌を採りあげておきます。この澄明で、清静超俗な境位を味わってみてください。

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて すすしかりけり [*5*6]

*【付記】原文ハ‘安養寺秘蔵版’ト‘三祖行業記初祖道元章’トヲ照合比較ノ上掲載シ。

06/03/10 筆者意識ス。

*2【註】『正法眼蔵』ノ「溪声山色」ヲ参照セタイ。 *3【註】修とは修業の意。証とは修業の末の悟りの境地。 *4【註】「示衆」刊抜粹。 *5【註】「本面目ヲ詠ズ」刊。

*6【註】74歳で示寂した良寛の辞世の句；「散る桜 残る桜も うらをみせ おもてをみせて 散るもみじ」「形見とて なに残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋はもみぢ葉」この本歌どりで、いかに一代の碩徳、道元に心酔していたか偲ばれる。——06/03/21 バウワウおじさん